

羽生市における5歳児発達支援事業への協力について

牛 込 彰 彦
(こども学科 教授)

浦 (安 村) 由 希 子
(こども学科 特任講師)

1. プロジェクト研究の内容・意義・目的

5歳児発達支援事業（5歳児健診）の目的は学習障害や高機能自閉症、注意欠陥多動性障害といった発達障害の発見と支援を行うことであり、羽生市では各家庭への質問票の配布と各園への巡回相談を主にやっている。今回、我々は各家庭に配布する質問票の作成と結果の分析について協力したので、ここに報告する。

2. プロジェクトチームの構成

牛込彰彦 浦(安村)由希子

3. プロジェクト研究の方法と成果

(1) 対象：当該年度に5歳に到達する子ども（年中）453名

(2) 実施方法

1) 質問票の内容

① A用紙：保護者が子どもの発達の様子について、各質問に答えるものである。各質問肢は乳幼児ハンドブック（平岩）PARS（PARS委員会、2009）を参考に作成した。保護者は質問肢に対し、「はい」「いいえ」のいずれか該当するものに○を付ける。A用紙の質問は主に高機能自閉症や注意欠陥多動性障害といった行動上の問題を有するものに焦点を当てた内容であり、落ち着きの無さや目線の合い難さなどを問うものである（計15問）。

② B用紙：保護者が子どもに実際に発達課題を行うものであり、これは主に学習障害の言語の問題を拾うために、田中（2010）を参考にLCスケール（大伴他、2008）という言語課題検査を参考に作成した。

具体的には保護者が子どもに絵を見せながら、簡単なお話をする。その後、選択肢の絵を見せ、いくつかの質問を行い、子どもには該当する絵を指差させる。

保護者「ここは公園です。たかし君はアイスを食べています。」

「食べていたのはどこですか？」

子どもが公園の絵を指差せたら、正解となる。

お話は2題あり、それぞれのお話について質問が3問ずつある（計6問）。

2) 発送部数：453の家庭に郵送し、A用紙、B用紙を同封した返信用封筒にて返してもらった。

(3) 結果

1) 回収率：324枚（71.2%）

2) 質問票の解答

A用紙（表1）：質問肢によって、0.9～27.0%と回答（該当率）に幅があった。

B用紙：計6問の質問肢の正答率の平均は85.6%であった。

表1：A用紙の結果

	質問肢	該当率 (%)
1	お子さんは食事を誰と食べますか。	—
2	治療中、経過観察中の病気やけがはありますか。	14.5
3	今までの健診で何か指摘されたことはありますか。	14.2
4	視線が合いにくいと感じますか。	0.9
5	じゃんけんの勝ち負けがわかりますか。	6.0
6	ボタンのある洋服などの脱ぎ着が一人でできますか。	1.5
7	外に行った時など、多動で、手を離してしまうどこかに行ってしまう困ることが多いですか。	14.2
8	親などが関わろうとしても、一人でいるのが好きで一人で遊ぶことが多いですか。	3.4
9	こだわりが強く、困っていますか（園の準備や食事、遊びなど）。	11.0
10	保育園（所）や幼稚園では、みんなと一緒に行動できていると聞いていますか。	3.1
11	園での様子など、日頃お子さんとお話していますか。	2.0
12	お母さんやお父さんの話を落ち着いて聞いていられますか。	10.2
13	お母さんやお父さんの言うことを理解して行動できますか。	4.3
14	初めての場面に直面すると、不安ですがりついたり、戸惑うことが多いですか。	27.0
15	お子さんを「育てにくい」あるいは「お子さんとうまくいっていない」と困ることが多いですか。	3.2

※ 該当率とは、その問いに対し、負の反応があった割合のこと。例えば、「治療中、経過観察中の病気やけがはあるか」の質問に“ある”と答えた割合。または「じゃんけんの勝ち負けがわかりますか」の質問に“いいえ”と答えた割合。

4. 今後の展開

各園を訪問し、子どもの発達の様子を確認したり園の先生より話を伺い、チェックリストの精度を高めていく予定である。

〔文献〕

1. PARS委員会編著. PARS (Pervasive Developmental Disorders Autism Society Japan Rating Scale). スペクトラ出版社. 2009
2. 田中裕美子, 入山満恵子. 言語学習障害を幼児期に発見する方法の検討 (3) 小2スクリーニング結果. 日本コミュニケーション障害学会. 2010, 36, P.52
3. 大伴潔ら. 言語・コミュニケーション発達スケール LC スケール. 学苑社. 2008